戦時中の思い出

柳原圭介

　戦時下のつらい思い出はあまり語りたくない。しかし、この苦難な時代をのりこえた経験を後世へ伝えるのも自分のつとめと思う。
　戦争体験を一部でも人に語る勇気はない。ただ、自分が育った青春時代の弱さをかみしめるだけである。

　わたしが育った時代を振り返ると、1931（昭和 6）年日本軍が起こした満州事変、1937（昭和 12）年、中国 盧溝橋で発した支那事変、1941（昭和 16）年、大東亜戦争（第二次世界大戦）と、その間、敗戦まで 15 年間、戦争の時代をすごしてきた。

　わたしは、1928（昭和 3）年 8 月、熊本県熊本市で生まれました。少年時代、教育は戦時体制、国家のため身を賭して尽くすため学業一色でした。戦前の義務教育は尋常小学校尋常 6 年、高等科 2 年でしたが、大東亜戦争にともなって国民学校へと改称されました。

　中学校時代は「軍事教練」、学徒動員、勤労奉仕、軍事工場生産奉仕など学校で学ぶことはなく、戦時体制一辺倒でした。当時、14 歳。軍事教練とは、学科のひとつで、軍令部から派遣された陸軍将校による訓練が毎日おこなわれました。小銃（三八銃）、飯盒、短剣を装備して、駆け足、匍匐前進、わら人形突き刺し、夜行軍など、さながら軍隊兵役に入隊したような授業でした。

　勤労奉仕は、男子が農家に泊まり込み、田植え、稲刈り、麦刈り、桑畑開墾、松油採取など 7～10 日間、農家の家族と寝食をともにして労働をしました。さらに、学徒動員（14 歳）のときは、鹿児島鹿屋海軍飛行場で飛行機を格納するための掩体壕（えんたいごう）構築、土木作業にも従事しました。

　食べ盛りの中学生におかゆのような雑炊で、ほとんどの生徒は腹をこわしましたが、薬も与えられず、黙々とモッコで土を運び壕をつくっていました。家の中に居ては、空襲警報が鳴るたびに庭先の防空壕に入り、夜は灯火管制のもと、灯りが外にもれないように黒い覆いを被せて息をひそめていました。
　1942～43（昭和 17～18）年、私が 14 歳後半から 15 歳になると、日本の戦局が悪化して、陸海軍の少年兵は、志願することとなってきました。どうせ、20 歳から兵役に入隊しなければならないので、昇進が早い志願兵が得だと思うとともに、その時代、国家総動員令が発

令され、病弱男子以外は国策、戦意高揚のため軍人志向、お国のためという使命感と自身の生き方が密接に結びついていたように感じます。

そして、1942（昭和 17）年 8 月、海軍熊本鎮守府で身体検査を受けて、合格し、9 月、海軍予科訓練生として愛知県岡崎航空隊に入隊しました。6 か月の軍事教育期間を経て横須賀海軍航空隊に派遣され、実戦部隊として特別攻撃機体「銀河」の整備をしていました。すでに整備するための機体は少なく、他の航空機整備や格納庫づくりがほとんどでした。その間、先輩は毎日出撃し、戻ってこない日々が続きとても辛いおもいでした。

1945（昭和 20）年 8 月、横須賀追浜航空隊で玉音放送を聞き、終戦を知りました。19 歳でした。一週間ほどの残務整理を済ませて、除隊。退職金 200 円を受け取り、隊内大混乱のなか、毛布、僅かばかりの乾パン、酒（一瓶）を毛布に包んで故郷 両親家族が居る熊本に向かいました。

鉄道（国鉄）は破壊され、徒歩、野宿。食料が無く、歩いては畑のイモ、野菜を生食して 10 日間かけて、死のもの狂いで両親が住んでいる大江町九品寺に、身も心もボロボロになって着きました。あたりは焼野原で家は空襲で焼け落ちていました。もちろん、両親の行方はわかりません。聞く人もいなく呆然としている中、気を奮い立たせ、母の郷里 宇土市（熊本から南へ 8 里の地）までまた歩きだしました。

すでに力はなく這うようにして宇土市に着き、開業歯科医をしている母の兄をたずねましたが、此の地も 8 月 20 日の空襲（近くにカーバイド工場を狙った空襲の流れ爆弾）で焼野原、ここでも両親、兄弟に会えず、もう家族は全員死亡していると観念し、自分も此の地で生命を絶つ気になりました。

何がご縁かわかりませんが、たまたま通りかかった方から、宇土市からさらに 2 キロ地点の山のなかにご家族が疎開していると聞き、山のなかで横穴防空壕生活をしている両親、親戚と再会することができました。

このときの喜びは、生涯、人生で一生忘れることのできない感激の日でした。

わたしは、小学校から間接的にせよ、直接的にせよ、戦時下のなかで過ごし、成人したことになります。当時の思考や行動は、すべて戦争の影が深く残っています。わたしよりも数年先輩諸兄は、外地などで直接戦地に赴き、国家のために苛酷な戦いで生涯を終えた方々を思うとき、現在の自身の幸福がとても申し訳なく感じています。

戦後、60年以上経過し、日本が戦争をしたことすら知らない世代が増えています。
この拙い思い出が、少しでも後世の日本人にご理解いただけましたら、この上ない嬉しさで一杯です。
ありがとうございました。

2010年8月 盛夏